BRAIN

—脳—

ブレイン

ロビン・クック／林 克己訳

—脳—

ブレイン

ロビン・クック
林 克己訳

Hayakawa Novels

BRAIN

by Robin Cook
Copyright © 1981
by Robert Cook
First published 1981 in Japan
by Hayakawa Publishing, Inc.
This book is published in Japan
by arrangement with
Deborah Rogers Ltd., through
Tuttle-Mori Agency, Inc., Tokyo.

検印
廃止

ブレイン —脳—
昭和56年8月31日　再版発行

著　者　ロビン・クック
訳　者　林　克己
発行者　早川　清

発行所　株式会社　早川書房
東京都千代田区神田多町2—2
電話　東京(254)1551(代)
振替　東京・6-47799

印刷　信毎書籍印刷株式会社
製本　大口製本印刷株式会社

定価　1200円
0097-903450-6942

ブレイン —脳—

日本語版翻訳権独占
早 川 書 房
© 1981 Hayakawa Publishing, Inc.

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

愛をこめて、
本書を妻バーバラに献げる

脳髄から、そうして、脳髄からのみ
我らの嘆き、痛み、苦しみ、涙と共に、
また、我らの楽しみ、喜び、笑い、冗談も
生まれる……。

――ヒポクラテス
（「神聖な病い」第十七節）

1

三月七日

キャサリン・コリンズはどうにも決心のつきかねるまま、歩道から三歩階段を昇り、ガラスとステンレスのコンビネーション・ドアの前に立って、それを押した。しかし、ドアは開かなかった。彼女は身をそらしてドアの上を見あげ、そこに彫りこんである文字を読んだ。〈ホブソン大学医療センター――ニューヨーク市の病弱者のための施設〉。だが、キャサリンの頭の中ではこう読めても不思議ではなかった。〈汝ここを入らば、すべての望みを棄つべし〉

振りかえると、彼女の瞳は三月の朝の光を受けて収縮し、思わず自分の暖かい部屋に逃げ戻りたい衝動にかられた。いま一番入りたくないのはこの病院の中だった。しかし、歩き出さぬうちに、患者が何人か階段を昇って来て、彼女の横をかすめるように通り、立ち止まりもせずに中央外来のドアを開けて、そのまま不気味な建物の中へ吸い込まれていった。

キャサリンは一瞬目を閉じて、自分の馬鹿さ加減にあきれた。むろん外来のドアは手前に引き開けるようになっていたのだ！　彼女はバラシュート・バッグをしっかり小脇にかかえて、ドアを引き、黄泉の国へ足を踏み入れた。

まずキャサリンを襲ったのは臭気だった。それはこの二十一年の歳月の間、かつて経験したことのないものだった。圧倒的なのは薬品の臭い――アルコールと胸のわるくなるような甘い防臭剤の香だった。アルコールは空気中に漂う病原菌を押えようとしているのだと思い、また、防臭剤は病人の身体から発散する臭いを消すためだと彼女は悟った。この病院へやって来るためになんとか役立てようとしたキャサリンの自制心のかけらも、この臭気の襲撃の前にあえなく消え去ってしまった。何カ月か前にはじめてこの病院を訪ねるまでは、彼女は自分が死ぬことなど考えたこともなく、健康と幸福は当然約束されているものと思いこんでいた。だが、臭気に満ちたこの外来へ足を踏み入れたとたん、事情は一変し、最近の健康のつまずきへの思いが彼女

の意識の中を一杯に領するようになった。この激しい感情を押えるように下唇を噛みながら、彼女はエレベーターにむかって歩き出した。

病院の中の人混みはキャサリンにとってまことに厄介だった。人に触れられたり、息や咳を吹きかけられたりしないように、彼女はマユのように自分を包みこみたくなった。苦痛にゆがんだ顔、不気味な発疹、膿のにじみ出た吹きでものなどは見るのもいやだった。エレベーターの中ではもっとひどく、自分を押しまくっている病人たちがブリューゲルの描く群集図を思い出させるのだった。彼女はただ階を示す矢印だけをじっと見上げながら、婦人科の外来受付で申し出るせりふを稽古して、なるべく周囲を忘れていようと思った。「あの、あたしはキャサリン・コリンズといいます。大学の学生で、ここへは四回来ました。あたしは故郷へ帰って、身体のことをうちの主治医に相談したいと思いますので、ここの婦人科のカルテの写しがいただきたいのです」

これはまことに簡単なことのように思えた。キャサリンはエレベーター係のほうへ目を移した。男の顔はひどく幅広く、だが、横を向くと、頭はべちゃんこだった。キャサリンは何気なくそのゆがんだ顔形を見つめていたが、三階と告げるためにこちらを振り向いたとたん、男は彼女の視線に気づき、一方の眼を伏せながら、片方の眼に悪意をこめて、キャサリンをじっと見つめた。彼女は思わず顔を赤らめて、目をそらした。毛深い大男が降りるために彼女の身体を押して通った。彼女はエレベーターの壁を手で支えながら、傍の五歳ぐらいの女の子を見下した。女の子は緑色の片眼で微笑みをかえしたが、もう一方の眼は青紫色に膨れあがった大きな腫瘍の塊に蔽い隠されていた。

ドアが閉まり、エレベーターは再び昇っていく。めまいがキャサリンを襲った。それはひと月前に経験した二度の発作の前兆のめまいとはちがっていたが、それでも逃げ場のない、息詰まるようなエレベーターの中だけに恐ろしかった。彼女は眼を閉じて、閉所恐怖症の感じとけんめいに闘った。誰かが後ろで咳をし、細かいつばが頸にかかったような気がした。エレベーターはガタガタと揺れて、ドアが開き、キャサリンは四階の外来へ出た。そうして、壁側へ寄り、そこに倚りかかって、後から押してくる人を先に通らせた。めまいはすぐによくなった。それを確かめてから、二十年前に淡緑色に塗られたままの広い廊下を左手に

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

曲り、歩いて行った。

廊下は婦人科外来の待合室へ続いており、そこには患者や子供たちがいっぱいいて、煙草の煙が一面にたちこめていた。キャサリンはその真中を抜けて、右手の行き止まりの道へ入った。大学の婦人科外来は学生や病院の従業員のために、装飾や家具は一般の部屋と同じような待合室を別に設けてある。キャサリンがそこへ入って行ったとき、七人の女性がビニールシートのパイプ製の椅子に腰を下していて、一様にいらいらと古い雑誌のページをめくっていた。受付係の女性が机の後ろに坐っている。年は二十五歳ぐらい、漂白した髪に青白い皮膚、細面で、鳥のような感じの女で、エレン・コーエンという名前を示す名札を平べったい胸に付けている。彼女はキャサリンが机に近づいたとき、顔をあげた。

「あの、あたしはキャサリン・コリンズといいます」……その声は考えていたほどきっぱりした調子にならないのが自分にもわかった。実際に、言葉の終りのほうは、まるでどうかお願いしますというような、あわれな響きになったようだった。

受付係はちらりと彼女を見て、「記録がほしいんですって?」と、言った。その声音には軽蔑と不信の色がこもっていた。

キャサリンはうなずいて、なんとか微笑んでみせようとした。

「では、その話をブラックマンさんにしていただかなくては、ね。まあ、お坐りになって」エレン・コーエンの声は一段と無愛想で高飛車になった。キャサリンは後ろを向き、机に近い所に空いた椅子を見つけた。受付係は書類棚に行って、キャサリンのカルテを引っ張り出すと、診察室へ通じるドアのひとつを抜けて姿を消した。

キャサリンはつやのある褐色の髪を無意識に撫でて、左肩の上に垂らした。それは彼女のいつもの癖で、とくに緊張した時によくやる動作だった。彼女は灰青色の、輝いた眼をした、魅力のある女性で、背は一六〇センチほどだが、活動的な性格のせいでもうすこし高く見えた。大学ではおそらくその明るさから友人たちに好かれていたし、両親にも極端に可愛がられていた。両親は誘惑の多いニューヨークのジャングルの中にひとり娘を送り出すことが心配だったけれども、じつは、キャサリンにわざわざニューヨークの大学を選ばせたというのが、両親のその懸念と過保護の

せいだともいえるし、彼女は自分の生来の力と個性をこの街が発揮させてくれると信じていた。そうして、少なくとも最近のこの病気までは順調にいっており、彼女は両親の注意を嗤っていたし、ニューヨークは彼女の街となり、その脈動する生気を愛していたのだった。

受付係は再び姿を現わし、坐ってタイプを打ちはじめた。キャサリンはそっと待合室の中を見廻し、若い女性たちが名も知らぬ家畜のようにじっと頭を垂れて順番を待っているのを見た。そうして、自分は診察を受けるために待っているのではないことを心から嬉しく思った。まったくあんないやな思いをしたことはない。それを今まで四度も我慢した。最後のはやっと四週間前のことだ。診察を受けに来ることは自分の自主の精神にとって一番つらい仕事だった。実際に彼女は郷里のマサチューセッツ州、ウェストンに帰って、自分の婦人科の主治医、ウィルソン先生に診てもらうほうがよっぽどいいと思った。先生は自分をはじめて診てくれた、たった一人の医師だし、ここの病院のレジデントたちより年上で、ユーモアのセンスもあり、それで診察の際の屈辱的な一面を忘れさせ、なんとか我慢できるようにしてくれるのだった。ここはそうではなかった。この外来は非人間的で冷たく、都会の病院という環境も手伝って、診察の度に悪夢のような思いをさせられるのだ。しかし、キャサリンはじっとそれに耐えた。少なくとも病気がおこるまでは彼女の自主の精神がそれを命じたのだった。

ブラックマン看護婦が数ある部屋のひとつから出て来た。四十五歳のがっしりした体格の女で、漆黒の髪を引っつめにして、頭のてっぺんにきっちりと巻いており、職業上、パリッと糊づけした真白な白衣を着て、その態度も冷静で能率よく、好んで病院の中を駈け廻る風に見えた。もう十一年も医療センターに勤めているのだ。

受付係はブラックマンに話しかけ、キャサリンにも話の中に自分の名前の出ているのが聞こえた。看護婦はうなずき、ちらりとキャサリンのほうを見やった。そのきびきびした外見とはうらはらに、ブラックマンの暗褐色の眼には非常な暖かみが湛えられているように見えた。この人は病院の外ではきっととてもいい人間にちがいないと、キャサリンはとっさに思った。

しかし、ブラックマンはキャサリンに話しかけにやっては来ず、エレン・コーエンと何かひそひそ話をした後、また診察室へ戻って行ってしまった。キャサリンは顔の赤く

なるのを覚えた。これは自分の主治医に診てもらいたいと申し出た患者に対して病院側の人間が不快さを示すやり方で、わざと自分を無視したのだろうと思った。彼女はおずおずと表紙のとれた古い〈レディーズ・ホーム・ジャーナル〉に手を伸ばしたが、それに注意を集中することはできなかった。

そこで、その晩家に帰ることを考えて時間をつぶすことにした。両親はどんなにびっくりするだろう。昔の自分の部屋に入って行く情景が目に浮かぶ。クリスマス以来帰っていないが、出て来た時とそっくりそのままになっているにちがいない。黄色いベッドカバーと、それに似合いの色のカーテン、少女時代の記念の品々が母親の手で大事に保存されているはずだ。母親をはっきり思い出したところで、キャサリンは両親に電話をかけて、家に帰ると言うべきかどうか、あらためて考えてみた。ローガン空港に迎えに来てもらえる点はプラスだが、なぜ家に帰ってくるのか詰問されるのは困る。病気の話は会ってからしたい、電話では話したくないのだ。

ブラックマンは二十分後にまた姿を現わして、また受付係と小声で話をしている。キャサリンは雑誌に気を取られているようなふりをした。やっと看護婦は話しやめて、キャサリンの所へやって来た。

「コリンズさん？」ブラックマンはややいらいらした調子で話しかける。

キャサリンは顔をあげた。

「あなたのカルテの記録がいり用だと聞きましたが？」

「そのとおりです」キャサリンは雑誌を置いて、答えた。

「私どもの治療が気に入りませんか？」と、ブラックマン。

「いいえ、そんなことはありません。ただ、家へ帰って主治医に診てもらうのに、あたしのカルテの内容を全部持って帰りたいと思ったんです」

「それはちょっとおかしいですね。私どもはお医者様から要求があったときだけお送りすることになっています」

「あたしは今夜家に帰るので、記録を持って行きたいんです。先生が見たいとおっしゃったら、送ってもらう間待っていなくてはならないでしょう。それは困ります」

「この医療センターでは、そういうことはしないのですがね」

「でも、あたしが要るときは、記録の写しをいただく権利があると思います」

こう言ってしまってから、キャサリンにとって不愉快な沈黙の時間が続いた。このような強引さは今まで経験したことがなかったのだ。ブラックマンはまるで反抗的な子供に対して腹を立てた親のように彼女を見据え、そのうるんだ黒い瞳の凝視を、キャサリンも睨みかえした。

「それでは、先生に話していただかなくてはね」ブラックマンはいきなり吐き出すように言い、相手の答を待たずにその場を離れて、手近かのドアから出ていってしまった。それを締め括るようにガチャンと掛け金のかかる音がした。

キャサリンはホッとひと息ついて、あたりを見廻した。ほかの患者たちは、病院の職員が日頃の慣習を破られて示した軽蔑の念にさも同調しているように彼女をじっと見つめていた。キャサリンは自分がきっと神経過敏なのだろうと我が身に言いきかせ、なんとか自制しようとして、患者たちの視線を感じながら、手許の雑誌を読むふりをした。そうして、亀のように甲羅の中へ身を隠すか、それとも立ちあがって出て行くかしたいと思った。しかし、どちらもできぬまま、時はつらく、のろのろと過ぎていった。何人かの患者が診察に呼ばれていった。自分が無視されているのはたしかだった。

四十五分ほど経って、皺くちゃの白衣にズボン姿の外来の医師がキャサリンのカルテを手に出て来た。受付係は頭を振って彼女のほうを示し、ハーパー医師はゆっくり近づいて彼女の真前に立った。頭は禿げあがり、両耳の上に生えたわずかの毛を目の荒いブラシのように襟首の所へ撫でつけている。彼は前に二度ほどキャサリンを診察したことのある医師で、半透明のゴム手袋越しに異様に見えた毛深い彼の手と指を、キャサリンははっきり憶えていた。

キャサリンはわずかでも相手の暖かみを期待しながら、医師の顔を見あげた。しかし、そのかけらさえなかった。その代りに、彼は黙ってカルテを開き、左手でそれを支えながら、右の人差し指で文字を追っている。それはまるで牧師が説教しているような格好だった。

キャサリンが目を伏せると、男のズボンの左脚に小さな血痕が一列についているのが見えた。ベルトの右側にはゴム管を、左側には呼び出しベルをつるしている。

「なぜ婦人科のカルテが必要ですか？」男は彼女の顔も見ずに、訊ねた。

キャサリンはもう一度自分の計画を話した。

「それは時間の無駄というものですな」ハーパー医師はな

おもカルテのページをめくりながら、「実際、このカルテにはほとんど何も書いてないんです。二、三回、パップ塗抹検査でわずかの異型細胞、グラム陽性の検出、これは子宮頸部の糜爛ということで説明がつくでしょう。つまり、これだけでは誰の役にも立ちはしない。ここに膀胱炎の所見もありますが、これはあなたも認めたように、症状の出る前日のセックスのせいにまちがいなく……」

キャサリンは極端な恥かしさで顔のほてる思いがした。待合室中の人々にこの話は聞こえたにちがいない。

「……いいですか、コリンズさん。発作をおこすあなたの病気は婦人科となんの関係もないんです。ぼくは神経科へ行って診てもらうことをすすめたいな……」

「神経科へも行きました」キャサリンは相手の言葉をさえぎった。「そうして、そちらの記録ももらってあります」必死に涙をこらえた。いつもはそれほど感情家ではないはずだが、たまに泣きたくなると、それを抑えるのがとてもむずかしくなるのだ。

デイヴィッド・ハーパー医師はカルテからゆっくり顔をあげて、一息吸うと、半ばすぼめた口から音を立てて吐き出した。彼はうんざりしていた。「ねえ、コリンズさん、あなたは、ここでとてもいい治療を受けているんですよ……」

「あたし、治療のことをとやかく言っているんじゃありません」キャサリンは顔を上げずに言った。涙が両眼に溢れて、今にも頬を流れ落ちそうになっていた。「ただあたしの記録がほしいだけなんです」

「ぼくの言いたいのは」と、ハーパー医師は言葉を続けた。「婦人科の診た状態では、ほかに何も言うことがないということ、それだけですがね」

「どうか、あたしの記録を下さいませんか。それとも、院長先生のところへ行かなくてはならないでしょうか？」彼女はゆっくりハーパー医師を見上げ、眼の下からこぼれ出た涙をこぶしで押えた。

医師はついに肩をすくめた。カルテを受付係の机に投げて、コピーを作るように言ったとき、彼の息といっしょに悪態をつくのがキャサリンの耳に聞こえた。彼はさよならも言わず、後も振りかえらずに、そのまま診察室のほうへ姿を消していった。

キャサリンがコートを着たとき、身体の震えを感じ、また、めまいを覚えた。彼女は受付係の机のところへ行き、

その外縁につかまって倚りかかり、身体を支えた。
鳥のようなブロンド女は彼女をわざと無視して、書類のタイプを打ち終えた。タイプライターに封筒を差し込んだとき、彼女はやっとすぐ目の前にキャサリンのいるのに気づいたようだった。「これでいいわ。ちょっと待って」エレン・コーエンはひと言ひと言、いらいらした強い調子で言い、封筒にタイプし、書類を入れて封をし、判を押すと、立ち上って、キャサリンのカルテを一緒に持ち、隣室へ消えた。その間彼女はずっとキャサリンの視線を避けていた。
さらに患者が二人呼ばれて行った後、キャサリンはやっとマニラ紙の封筒を渡された。なんとか相手にありがとうと言ったが、その返事はかえって来なかった。そんなことはどうでもよかった。封筒を小脇にかかえ、バッグを肩にかけて、彼女は身を翻すと、婦人科の一般待合室の人混みの中を半ば駈けるように通り抜けた。
重くのしかかるめまいの波を感じて、キャサリンはよどんだ空気の中に足を止めた。気の転倒していたところに、急に早足で歩いたのがいけなかった。目の前が暗くなり、思わず待合室の椅子の背につかまった。マニラ紙の封筒は腕の下から床に滑り落ちる。部屋がグルグル廻り、彼女はその場にくず折れた。
と、自分の上腕を両脇からかかえて、支えてくれる力強い手を感じた。そうして、誰かが自分を励まし、大丈夫だ、なんでもないと言ってくれる声を聞いた。彼女はちょっと坐らせて下されば結構ですと言おうとしたが、舌がもつれていうことをきかない。廊下に真直ぐ立たされて、両脚がまるであやつり人形のように、空しく床に踊っているのがぼんやりとわかった。
ドアがあり、小部屋があった。ぐるぐる廻るいやな感じはまだ続いていた。病気なのかしらとキャサリンは思い、冷や汗が額に浮かんだ。床の上におろされるのがわかり、ほとんど同時に、目の前がはっきり見えるようになって、部屋のぐるぐる廻るのが止まった。白衣姿の医師が二人、傍にいて、助けてくれていた。彼らはやっとの思いで彼女のコートを脱がせ、駆血帯を腕に巻いた。人混みの待合室を出られ、みんなの見世物にならずにすんだのが彼女にはうれしかった。
「もう気分はよくなりました」キャサリンは目をしばたたかせながら、言った。
「そりゃよかった」と、医師のひとりが言った。「何か注

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com